



南房総の風し

『みんなの学校』～学校・家庭・地域連携を通して～

皆さんは、映画「みんなの学校」をご存知ですか？

大阪市立大空小学校。大阪市住吉区にある公立小学校。全校児童数・約220人のうち、特別支援の対象となる児童の数は30人を超えています。教職員は通常のルールに沿って加配されていますが、地域住民や学生のボランティアだけでなく、保護者らの支援も積極的に受け入れた「**地域に開かれた学校**」として、**多くの大人たちで見守れる体制**を作っています。(具体的には、下記の地域学校協働活動+α)

学校の理念は「**すべての子どもの学習権を保証する学校をつくる**」であり、開校以来、不登校はゼロ。(学校の噂を聞き、全国から不登校・問題行動等、たくさんの課題を抱える子どもたちが入学しているにもかかわらず！)唯一のルールとして「**自分がされていやなことは人にしない言わない**」という「**たったひとつの約束**」があり、子どもたちはこの約束を破ると「やりなおす」ために、やり直しの部屋(校長室)へとやってきます。校長先生をリーダーに、**教職員・地域住民・保護者・子どもたちが一体となって教育活動を実践**することで「**不登校ゼロ**」を続けています。(学校や地域で映画上映会を開催することができます)

『地域学校協働活動』

千葉県学校教育の指針では、「生きる力」を育成するために、「**社会に開かれた教育課程**」の実現に向けたカリキュラム・マネジメントの確立や「**地域とともに歩む学校づくり**」を進めるとしています。

また、平成29年には、地教行法が一部改正され、「**コミュニティスクール(学校運営協議会)**」設置が努力義務化される等、学校・家庭・地域の連携が求められています。

このような中、管内の各学校・地域では、地域や家庭と連携し、様々な取り組みが実施されています。木更津市では、「**学校支援ボランティア活動推進事業**」を全小中学校で20年以上の長きにわたり実施し、大きな成果を上げています。君津市では管内の小中学校では初となる「**コミュニティスクール**」を周西南中学区で設置し、地域と連携・協働した学校運営を進めています。その他の市町でも「**放課後子ども教室**」「**土曜スクール**」「**地域学校協働本部**」「**家庭教育支援チーム**」等の取り組みが行われています。

【実際に管内で実践されている取り組み】



これらの取り組みは、子どもたちの「生きる力」育成の一助になるに留まらず、**教職員の働き方改革**にもつながります。地域には「**学校を応援したい**」「**子どもたちの役に立ちたい**」という応援団がたくさんいます。

学校や子どもたちに関わる課題を学校だけで解決するのではなく、**地域に協力を求める**。逆に地域の課題解決に学校も関わろうとする。この相互の関わりが「**地域とともに歩む学校づくり**」であり、「**すべては南房総の子どもたちのために**」につながっていると考えます。

“豊かな体験”が子どもたちを成長させる♪

前ページで取り上げた「地域学校協働活動」の中でも、管内で最も実施されているのが「放課後子ども教室（土曜スクール会）」です。この教室の大きな目的は「子どもたちの居場所の確保」「地域住民との交流」ですが、併せて「豊かな体験活動」も目的の一つに上げることができます。

学校でも「遠足」「宿泊学習（修学旅行）」「運動会」「文化祭」「職場体験」等、年間を通して、様々な体験学習が行われています。それでは、なぜ体験学習にこれだけ多くの時間を割いているのでしょうか？ここでは、体験学習の意義について考えます。

新学習指導要領第3章教育課程の編成及び実施 1章第3の1の(5)体験活動では、「児童が生命の有限性や自然の大切さ、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう…」と記載されています。

国立の青少年教育施設で実施された体験活動プログラムで子どもたちが大きく変容した事例を紹介します。当該施設では、幼稚園児から大学生・社会人の宿泊研修の指導・支援と併せ、教育事業として「被災地の子どもたちの支援」「ニート引きこもり、不登校等対策支援事業」「日本初のネット依存症の子どもたちの対策事業」等を実施しています。これらの事業では、“集団宿泊生活（キャンプ）”“豊かな体験活動”等を通して、基本的な生活習慣の確立・自己肯定感・社会性等を高めていきます。その成果として、不登校やネット依存症の子どもたちの約8割がキャンプ終了後、復学したり、社会復帰を果たしたりすることができたとの報告があります。事業企画・立案のポイントを以下に示します。

事業（行事）を成功させるためのポイント

- ①目的を明確にし、ゴールをイメージする…事業（行事）終了時の子どもたちの姿を想像する。
- ②PDCAサイクルを活用する…振り返り（反省）を次の活動に生かす。
- ③主役は子どもたち！…スタッフ（教職員）は一流の演出家でなければならない。子どもたちを光輝させる。
- ④寄り添い・共感し・頑張りを賞賛する…同じ時間、空気を共有することで信頼関係が生まれる。
- ⑤“ほんもの”に触れる…“ほんもの”と関わり、“ほんもの”に触れることで、現実の世界の素晴らしさがわかる。

→子どもたちの心が動く（心震えるような）体験を！

学校行事でも、同様のことが挙げられます。せっかくやるのだから、実り多き時間にしたいものです♪



ネット依存の子どもたち（富士山頂での1枚）

緘黙の少女「みーちゃん」の奇跡♪ ～被災地の子どもたちの支援キャンプでの実話～

「新友は親友となり信友をこえて心友となる」キャンプのテーマです。小学校5年生のみーちゃん（キャンプネーム）は緘黙…家族以外の前では、言葉を発することができません。そんな少女がキャンプにやってきました。キャンプのスタートは、自己紹介から始まります。順番に自己紹介が進み、みーちゃんの番です。当然、彼女は言葉を発することができません。寄り添っていた大学生スタッフ（今は富津市内小学校で講師）が優しく彼女に声をかけ、皆に事情を説明してくれました。それからの1週間、キャンプの仲間たちは、みーちゃんを思いやり、優しい言葉をかけ、一緒に活動をしました。そしてキャンプの集大成として挑んだ富士登山、「全員であの頂に立とう」と誓い合い、見事に全員が日本一高い所に立ち、抱き合いながら涙しました。

1週間のキャンプは、あっという間に過ぎ去り、最後の夜を迎えました。最後の夜、キャンプファイヤーを囲みながら、一人一人がキャンプに参加しての感想とこれからの抱負を語ります。どの子もキャンプ前とは見違えるほど逞しくなり、ちょっとだけ大人に見えます。いよいよ、みーちゃんの番がやってきました。みーちゃんは…話すことができません。その時です…一人の6年生の男の子が「みーちゃん、よく頑張ったよ。みんなわかっているから大丈夫だよ」と言いました。それに続いて、たくさん子どもたちが同様に声をかけていきます。みーちゃんは泣きながら、別室に走って行ってしまいました。しばらくすると、スタッフとともに、みーちゃんが戻ってきました。その時です、小さな声でしたが、みーちゃんは勇気を振り絞って「みんな、ありがとう」と声を発したのです。会場は大きな歓声と拍手に包まれました。仲間の優しさ、みーちゃんの勇気が起こした奇跡の瞬間でした。

この話には続きがあります。翌年のことです。6年生になった、みーちゃんは再びキャンプに申し込みをしてきました。スタッフ一同、前年のことがあったので、一抹の不安を覚えながら、キャンプ当日を迎えました。お母さんに送られてきた、みーちゃんは私の顔を見るなり、大きな声で私の名前を叫びながら走り寄って来てくれました。お母さんに話を聞くと、「みーは、今年のキャンプ以来、変わりました。今では、とても活発で元気に学校に通っています。」本人は「去年はみんなに支えてもらった。だから今年は私が皆を支える。」と話していたそうです。“体験”と“仲間”が起こした奇跡のお話でした。 文責：学校・家庭・地域連携班